慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	良知力編 『資料ドイツ初期社会主義義人同盟とヘーゲル左派』によせて
Sub Title	Zur Materialien des deutschen Frühsozialismus : Der Bund der Gerechten und Linkshegelianer, herausgegeben von C. Rachi
Author	蔦木, 能雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.8 (1976. 12) ,p.683(75)- 695(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19761201-0075
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19761201-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

良知　力編

『資料ドイツ初期社会主義義人同盟とヘーゲル左派』によせて

蔦木　能雄

(一)

マルクスやエンゲルスをより正しく理解するために彼等の諸著作を読み，研究し，解釈を試みることは当然の作業である。しかし，あらゆる人の思想が時代の産物であるように，彼等の思想とてその時代を抜きにしては考えることができない。

「マルクス・エンゲルスについての，数多くの，いなあまりに多くの文献が書かれている今日でさえ，なお彼等の理論と実践の跡を正確に追跡し直し，彼等がその理論と実践によって画き出した真の生きた実像においてとらえ直す作業は，ほとんどこれから始められなければならない[1]」という声はよく聞く。しかし，マルクスやエンゲルスの言葉を借りるだけでは，そしてまた彼等の諸著作のみをいくら追跡し構成し直しても，真の実像など出て来はしない。それどころか思想史の同義反復に終ってしまう。

「これまでの研究はマルクス・エンゲルス中心でありすぎたのではないだろうか。そればかりか，マルクスやエンゲルスの正しさや偉大さを強調することが，多くの場合，方法の前提となっていたのではないか。もちろん……マルクスやエンゲルスの偉大さを否定しようというのではない。その逆である。彼等が偉大であったことは何度確認しても確認しすぎることはない。しかし，それは学んで確認するということであって，学ばずして前提するのではない。こうしたあたりまえのことが，自覚されてこなかったように思える[2]。」

とりわけ，若きマルクスをめぐる議論にこうした傾向が見られる。若きマルクスの諸著作についての解釈は山と積まれている。しかし，若きマルクスの批判的作業の対象や，彼の時代と背景に関する研究は極めて乏しい状況である。

ここ数年来，1848年ドイツ3月革命前期に関する同時代資料の復刻と相まって，ドイツ初期社会主義研究の分野で労作が発表されるに及び，この時代における思想諸潮流が明らかにされつつある。

(二)

ドイツ初期社会主義研究は新しい段階に入ろうとしている。若きマルクス・エンゲルスの同時代資料の発掘・蒐集を通じて，ことにドイツ3月革命を象徴する『共産党宣言』の成立と背景をめぐる研究は大きな前進をとげた[3]。この領域での良知力氏の貢献は注目に値する。

氏は『初期マルクス試論[4]』（以下『試論』と略）によって，それを「若きマルクスの思想の生成と発展を同時代資料にそってたどりながら，それが運動史としてもちえた固有の意味をつきとめるための準備作業[5]」とした。そして『試論』で紹介された諸資料の一部は『マ

注（1）山之内靖『マルクス・エンゲルス世界史像』未来社，東京，1971年，8刷，p. 9.
（2）良知力『マルクスと批判者群像』（以下『群像』と略）平凡社，東京，昭和46年，p. 274.
（3）何よりも先ず *Der Bund der Kommunisten Dokumente und Materialien-Bd1. 1836-1849* Berl, 1970を挙げねばならない。それと David Mclellan 氏の諸研究が重要である。
（4）良知力『初期マルクス試論』—現代マルクス主義の検討とあわせて—（以下『試論』と略）未来社，東京 1971年，特に本書のⅡ初期マルクスにかんする資料的研究の項（p. 91-p.198）を参照。
（5）上掲書，p. 91.

ルクスと批判者群像』（以下『群像』と略）となって結実する。『群像』ではマルクス・エンゲルスと3月革命前期の革命家群像，とくにヘス，ワイトリング，シャッパー等がドイツ3月革命の戦略・戦術の確定過程上に生き生きと描き出された。しかし，同書の「あとがき」に記されているように「本書は最初のプランでは三部にわけて書かれるはずであった。すなわち3月前期のマルクスとエンゲルスの発展を一応の軸としたから，それをめぐる運動ないし傾向を三部に整理してえがこうとした。ワイトリングや義人同盟を中心とした手工業者共産主義，ヘスを指導理論とした哲学的社会主義，そして最後にバウアー兄弟を主軸とするベルリンのアナーキズムがその三つである。……それによって3月前期のマルクス思想の形成史が側面から固められるし，いわゆる初期のマルクス発展を48年革命前史として運動のなかに位置づけられることも可能なはずであった。」[6]このうちの，「バウアー兄弟を主軸とするベルリンのアナーキズム」は，『資料ドイツ初期社会主義—義人同盟とヘーゲル左派』[7]（以下『資料』と略）に収められることになる。

(三)

『資料』が公刊されたのは1974年である。本書に収録されている資料は36篇。その選択・分類・配列の当否は別として，Ⅰ．四八年革命路線の確定過程に17篇（内訳は，義人同盟をめぐる諸文書として14篇，革命前における労働者階級の状態として3篇），Ⅱ．ヘーゲル左派のイデオロギー闘争に19篇（内訳は，プロイセン国家批判に関するもの4篇，現状批判とアナーキズムと題して7篇，真正社会主義と共産主義として8篇）が収められている。[8]すべて本邦初訳であるという。[9]

『試論』から『群像』を経て『資料』に到る著者の意図を明らかにしておこう。

まず第一に，若きマルクスの発展は単なる彼個人の精神の発展史ではなく，「それ自体が3月革命前におけるひとつの戦略史」[10]であるということである。つまり，『独仏年誌』も『聖家族』も『ドイツ・イデオロギー』も『哲学の貧困』もそして『学位論文』さえもがそれぞれ3月前期の諸段階を反映したものとして革命戦略の確定過程を示すものと言えるのである。[11]「若きマルクスの著作をさまざまに分析し解釈し，ときにはまたそこから，さまざまなドグマをひきずり出しはしても，若きマルクスの思想展開を生きた運動史としてつかもうとする試みは無きに等しかった。3月前期の革命運動を抜きにした初期マルクスなどは実在しないのである」[12]から。

第二は，忘れ去られた人物・思想の再評価である。マルクスをマルクス個人として正当に評価し理解しようとするなら，マルクスの諸著作から彼の言葉だけを借りて，被批判者を一刀両断してはならない。

「過去の思想はとかく忘れられやすい。というより，多くの思想はいつかは忘れられる運命にある。その意味では，歴史は無数の墓場であろう。だがまた，たとえ忘却され埋没せしめられることはなくとも，誤解され歪曲され，その意味で葬られる多くの思想もあるだろう。ときによっては，ひとたび葬られたものを掘り返し，現時点の光に照らしてみる必要もあるかも知れない。「公正」な評価基準を何度でもつくりなおす作業も思想史に課せられた任務なのである。」[13]現在の高みに立って過去を一瞥することは容易なことなのである。

そして第三は，「マルクスの時代をしてマルクスを語らしめること」[14]である。

(四)

『資料』のすぐれた点は，すべて本邦初訳であり，同時代の原版から収録されていることのみにあるのではない。本書所収の資料各個別に付された解説，義人同盟をめぐる諸文書，革命前における労働者階級の状態，プロイセン国家批判，現状批判とアナーキズム，真正

注（6）『群像』p. 276.
（7）良知力編『ドイツ初期社会主義—義人同盟とヘーゲル左派』以下『資料』と略，平凡社，東京，1974年。
（8）『資料』に収録されている諸資料は本稿末尾に示す通りである。
（9）『資料』p. ii.
（10）『試論』p. 92.
（11）上掲書，p. 265.
（12）『群像』p. 275.
（13）上掲書，p. 273.
（14）『試論』p. 265.

社会主義と共産主義論，と題する各項目毎の小括は一読に値する。加えて編者の「解説四八年革命思想の断章」によって，読者はこれら資料の背後にあるマルクス・エンゲルスの諸活動と文筆上の批判的作業の響きを読みとるであろう。

さて，ドイツ初期社会主義の思想的出発点はドイツの現状批判という点で一致共通する。義人同盟もヘーゲル左派も真正社会主義もドイツの現状批判から出発する。

ドイツの現状とはプロイセンのキリスト教的ゲルマン国家がもたらす「封建的＝家父長的＝絶対主義的＝官僚的＝坊主的反動」[16]であり，「どうしようもなく既成的な権力機構」[16]である。

1815年6月8日，ドイツ連邦が成立する。連邦の中心勢力はオーストリアとプロイセンの二大国であり，更にそれに次ぐ勢力として四つの王国（バイエルン，ヴュルテンベルク，ハノーファー，ザクセン）が加わり，更に小国及び自由都市を加えて41の国家及び都市によって構成されていた。ドイツ連邦は連邦憲法を持ち，市民的諸権利についても，各国憲法の制定，出版の自由，貿易交通の自由，ユダヤ人の市民権の改善などをうたいあげていた。だが，それらは実行なき空文句に等しかった。ドイツ連邦はドイツ人民の統一と自由を保障するものではなく，むしろ各国の自立性を保障する権力機構と分立主義を強化したのである。それは解放戦争後，高まりつつあった反封建的，国民的運動に意識的に対抗する防波堤であった。[17]以後ドイツ連邦領土内の国々は数の上で若干の変化がある。

パリにいたハインリヒ・ハイネはこうしたドイツを道化にたとえて記している。「彼のぶちのある上衣は36枚のつぎはぎで出来ている。彼の頭巾には鈴のかわりにずしりと重い教会の鐘がぶらさがり，手にはでっかいベルを持っている。ただし，彼はこの若痛を考えようともしない。彼は愈々ふざけた茶番を演ずる。彼がときどき笑うのは泣かないためなのだ。苦痛が余り激しく胸を打つと彼は気ちがいのように頭を振り，頭巾につけているキリスト教の敬虔な鐘の音で自分の感覚を麻痺させる」[18]と。

キリスト教的ゲルマン国家のもたらす現実は「ドイツにおける封建的諸要素と近代的諸要素との雑居性をさし前にも進めず後にも退けぬ閉塞状況を意味する」[19]のである。ドイツの現状は「惨めなドイツ」そのままである。このドイツ的惨めさとは「ドイツにおける未熟な市民性を表わしていた。だからまたそれはドイツにおける資本主義の発達の特殊性を表わしていた。そしてそのドイツ的条件をつかむか，つかまないか，つかむとすればどうつかむかによってドイツ革命の道筋が決まった」[20]のである。

ドイツの現状は一切がちぐはぐであった。政治的諸制度の上で，資本主義の発達程度においてヨーロッパの後進国であった。エンゲルスは『ドイツの状態』と題してチャーティストの機関紙『ノーザン・スター』に報告する。「それは，すみからすみまで完全に腐敗と胸の悪くなるような退廃と生ける塊りであった。安んじていられる者は誰一人いなかった。……農民や商人や製造業者は吸血鬼の様な政府と不景気との二重の圧迫を感じていた。貴族や諸公達は臣民に対して苛斂誅求を行っていたにも拘らず，増大する支出に収入の歩調を合わせることができなかった。一切がまちがっていた」[21]と。

本『資料』には「惨めなドイツ」を象徴する具体的事例が豊富に見られる。ドイツの現状を知らずして若きマルクス・エンゲルスは到底語れない。彼らの批判的作業は生きた現実をとらえる。それ故，批判の響きは現実の一瞬一瞬をとらえたものとして聞えてくるのである。

注(15) Engels F., Die Bewegung von 1847. MEW Bd. 4. Berl. 1969. s. 495. 大月版『マルクス・エンゲルス全集』「1847年の運動」第4巻 p. 510.

(16) 『資料』p. 446.

(17) 上掲書，p. 194.

(18) ハインヒリヒ・ハイネ『フランスの状態』世界文学大系78. 筑摩書房 東京 1967 第5刷 p. 305-p. 306.

(19) 『資料』p. 453.

(20) 上掲書，p. 456.

(21) Engels F., Deutsche Zucstände. MEW. Bd. 2 Berl. 1970. S. 566. 大月版『マルクス・エンゲルス全集』「ドイツの状態」第2巻 p. 592.

(五)

ドイツの現状は非国家的で立ち遅れている。社会的にも，政治的にも，経済的にもイギリスやフランスにくらべて程遠い。

キリスト教的ゲルマン国家の政治権力機構の中で，とりわけ知識人はプロイセンのなかに国民国家の形成の担い手を見い出そうとする。少なくともプロイセン以外に彼らの理念を現実化するよりどころはなかった。[22] 政治，経済，社会的諸制度の上ではイギリス，フランスに及ばずとも学問的水準では肩を並べることができるという自負があったからである。「ドイツは社会的，政治的に世界史的現在に到達していないからこそ，つまりドイツは世界史の過去に属しているからこそ，世界史的現在を理念的かつ思想的に構築できるのではないか，そしてまた世界史的には現在ではなく，未来であるからこそ理念的に構成された真の現実であるからこそ，それが現状批判の基準として現状を測る真の理論として機能し得るのではないか，その時未来が，即ち真の現実が虚偽の現状を批判し，打倒し，超克するための武器となる」，[23] 若きヘーゲル派はこう考えたのである。若きヘーゲル派の現状批判の武器は無論ヘーゲル哲学である。しかし，彼らが現状批判を理念的に理論的に自覚的に行えば行うほど現実体としてのキリスト教的ゲルマン国家は非国家となっていく。

ブルーノ・バウアーはキリスト教批判を通じて自己意識の普遍的展開を，アーノルト・ルーゲはヘーゲル法哲学の人倫的規定を媒介にして理念の普遍化を行うことによってキリスト教的ゲルマン国家を乗り超えようとする。

若きヘーゲル派にとっては「現状そのものが世界史であり，現状のなかに批判的に身をおいた認識主体（自己認識）そのものが世界精神なのである」。[24] だから，若きヘーゲル派は現状批判から出発しながら「世界史を自らの中に読み込みながら，そのことによって同時に世界史を廃棄する」[25] のである。

だがキリスト教的ゲルマン国家を理論の上で，理念の上で，自己意識を通じて全面否定し得ても現実体として国家は依然として眼前に存在する。若きヘーゲル派が自己認識を深めれば深めるほど，理念的であればあるほど，現実の重圧が彼らの上にのしかかってくる。彼らの現状批判が熾烈を極める度合に応じてキリスト教的ゲルマン国家を素通りしてしまうのである。かといってこの点だけをとらえて若きヘーゲル派を観念論的だとして一笑には付せない。「青年ヘーゲル派は，いっさいの旧体制復活の試みに決然として立ち向かい，中断されていたドイツ精神の革命化を完成」[26] したのだから。

若きヘーゲル派の中で最大の理論家はブルーノ・バウアーである。彼のヘーゲル哲学批判，とりわけヘーゲルの秘教的側面，つまり無神論として読みとれる側面を徹底的にあばき出しながらプロイセンのキリスト教国家批判を行う論理は読む人の目を見張らせる。

デヴィド・マクレランはその著書の中で「バウアーからは，かれ（マルクス——引用者）の政治，経済などの分析にモデルとして役立つ，鋭敏で恐ろしくさえある宗教批判をうけついだ」[27] と述べている。

マルクス・エンゲルスの最初の共同著作『聖家族』でバウアーは批判される。本『資料』には，「マルクスの批判の意図を最終的に固めさせた」[28] といわれる『1842年—急進的批判の批判』，『いまや何が批判の対象であるか』が収録されている。前者は『ライン新聞』に代表された急進主義を批判したものだ。「急進主義者の願望，要求は，いまやすべて彼らの国家の理想をめぐって一つにまとまる。つまり，人間は政治的にならなければならず，そうなったときにのみ彼は人間と呼ばれるに値するというのである。……急進主義者は理論という名の国家宗教を持ち，思想という名のドグマを持ち，さらに自分の義務を持っている。彼はこのように説教し，こうして彼は自分と同じく考えようとしないすべての人々に排他的にふるまう」[29] と。『独

注(22) 『資料』p. 122.
(23) 上掲書，p. 448.
(24) 上掲書，p. 452.
(25) 上掲書，p. 452.
(26) 上掲書，p. 356.
(27) Mclellan David., *The Young Hegelian And Karl Marx.* Macmillan, London, Melbourne. Tronto. 1969 邦訳 宮本十蔵氏訳『マルクス思想の形成』—マルクスと青年ヘーゲル派—，ミネルヴァ書房，京都，1971，p. 263.
(28) 『資料』p. 293.
(29) 上掲書，p. 295-p. 296.

仏年誌』所収のマルクスの論文『ユダヤ人問題に寄せて』ではこう述べられている。「ユダヤ人とキリスト教徒との間の対立のもっとも強張った形式は宗教対立である。……対立を解くのには……宗教を揚棄することによってである。……殊にドイツのユダヤ人に対峙しているものは政治的解放一般の欠如と公式に宣言されている国家のキリスト教性である。しかしながらバウアーの頭のなかではユダヤ人問題は特殊ドイツ的事情によらない或る普遍的意義を有する」[31]と。マルクスの論文はバウアーの『ユダヤ人問題』*Die Judenfrage* Braunschweig. 1843, への批判であるが，バウアーとマルクスの決定的対立点は普遍的理念か実現か，という点にある。バウアーが政治的に変節したというのではない。バウアーの理論上の出発点からすれば当然の帰結であって，常に対象に向って思想の変化を見せているのはマルクスの方なのである。キリスト教的ゲルマン国家の現状批判を通じてプロイセンの政治的諸制度に鋭く迫ろうとする程マルクスとバウアーの距離は隔たるのである。普遍的理念か現実かを問えば問うほどバウアーの理論は天空に舞い上る。後者の論文『いまや何が批判の対象であるか』に至っては真の理論の敵は大衆であるとさえ結論される。「批判が自己自身と政治的啓蒙とを自らの対象とするならば，その必然的結果として，このように完成された形で現代に属する現象—すなわち大衆—こそ，批判がなかんずく研究しなければならない対象だということになる。大衆は，革命のもっとも顕著な産物であり，一封建的対立物の中和作用のなかから生じた沈澱物である。大衆は，民族のエゴイズムが革命闘争のなかで消耗しつくしてしまってから，そのあとに残った粘液である。……大衆は，前世紀の伝統を超克しようとする理論の生まれながらの敵である」[31]と。

理論が純粋化を目指し，批判の対象が極限化されてくるにつれ絶えず変化を見せる具体的現実に適応しなくなるのは明らかなことだ。バウアーの理論が尖鋭化する度合に応じてキリスト教的ゲルマン国家の心臓部に突き刺るどころか，その頭上を素通りしてしまうのである。

「1844年の終りまでに，マルクスとエンゲルスは，自分たちがブルーノ・バウアーおよびベルリン青年ヘーゲル派に賛成でないことを公然と表明しなければならないと感じた。かれらはこの表明を『聖家族』で行ったのであるが，この労作では，マルクスは親密に交った何年かの間かれがとった立場とは非常に異なったバウアーの立場の一つを議論しているので，バウアーの思想とマルクスの思想の類似性に関しては，ほとんど関心を示していない。……主題がちがっているからといって，マルクスの思考のパターンのいくつかにバウアーが及ぼした影響をあいまいにするとすれば，それは誤りであるだろう。」[32]

ブルーノ・バウアーについてはハレ大学のエルンスト・バルニコル教授（故人となられた）の手によって，その詳細が明らかにされた。[33]

(六)

若きヘーゲル派がヘーゲル哲学によって普遍的理念と自己意識の観点からキリスト教的ゲルマン国家批判（＝現状批判）を試みるなら，「義人同盟をめぐる諸文書」からは，富と貧困，所有と無所有，労働と享受といった観点から，いわば地上の批判を通じて現状批判が展開されるのがうかがえる。

「1834年から1840年までのあいだ，ドイツではあらゆる大衆運動が死滅していた。1830年と1834年の活動家達は，投獄されるか，または諸外国に亡命してちりぢりになった。」[34]

パリに亡命した者達はドイツ人民協会 (Deutscher Volksverein) を組織する。これは1834年年夏頃にドイツ亡命者同盟[35] (Der deutsche Bnud der Geächteten) となる。スイスに難を逃れた人々はジュゼッペ・マッチーニ (Guiseppe Mazzini) の指導で生まれた若きヨーロッパ (Das Junge Europa) のドイツ支部の形で若

注(30) Marx. K., Zur Judenfrage. 『ユダヤ人問題によせて』MEW Bd. 1. Berl. 1969. s. 348—s. 349. 邦訳，真下信一氏訳，国民文庫版，p. 278.

(31) 『資料』p. 310.

(32) Mclellan David., 宮本氏訳 前掲書 p. 125-p. 126.

(33) Barnikol Ernst, *Bruno Bauer Studien und Materialien-Aus dem Nachlass Ausgewählt und Zusammengestellt von Peter Reimer und Hans-Martin Sass-*. Van Gorcam & Comp. N. V. Assen. 1972.

(34) Engels F., *Deutsche Zustände*. MEW Bd. 2. S. 583. Berl. 1970. 大月版『マルクス・エンゲルス全集』「ドイツの状態」第2巻 p. 608.

(35) 拙稿，亡命者同盟について—『共産党宣言』前史の一断片—，『三田学会雑誌』63巻12号，を参照。

きドイツ（Das Junge Deutschland）[36]を1834年4月にBernに組織する。国外からの祖国解放闘争が始まったのである。ドイツ亡命者同盟も若きドイツも小ブルジョア的民主主義・共和主義的結社であった。前者は1834年7月に機関誌『亡命者』（*Der Gächtete*）を出版し，後者の方は「1835年新年」の日付で機関誌『北方の光』（*Das Nordlicht*）を出版する。パリの組織とスイスの組織との間には連絡があった模様である。

1835年1月23日付の手紙でヤーコプ・フェネダイ（『亡命者』の編集長，1835年4月にはパリを追放される）は『北方の光』との交換取決めを承諾した旨をZürichの編集者に知らせる。「……私は『亡命者』と『北方の光』との交換に関しまして貴殿の御申し出を受諾したいと考えます。私は，6号からおよそ30部を送付致します。それ以前の号につきましても同様であります」[37]と。相互の交換部数は『亡命者』30部に対して『北方の光』は100部であった[38]。

さて，『資料』には『亡命者』所収のフェネダイの論文『プロパガンダ』とテオドル・シュスターの論文『ある共和主義者の思想』が収録されている。後者の方が社会主義的色調は断然強い。

「同盟内部にはもともと前期プロレタリア的手工業職人の社会主義的ないし共産主義的要求と，ブルッシェンシャフト出身の亡命知識人にありがちな民主主義的ないし共和主義的理念の対立があった。この基本対立にさらに重なって，民主主義的運動理念の持主のなかにも，民主主義の枠を抜け出ずそのかぎり反共産主義的な分子と，基本的には民主主義者であっても社会革命の方向に大きく近づいた分子との対立が徐々に強まった[39]」。

シュスターの論文はワイトリングにも読まれたりする[40]。かといって従来の研究が示すように[41]シュスターに指導されて亡命者同盟左派分子が義人同盟を形成するというのは事実ではない。それどころかシュスターは同盟分裂には反対の態度をとったのである[42]。

亡命者同盟の組織は，と言えば厳格極まる位階階級的カルボナリ組織を採用していた。それは最上級に「ブレンプンクト」（Brennpunkt）次に「ディカステリーン」（Dikasterien）——後に「クライスラーガー（Kreislager）と改称——，更に「ベルク」（Berg）——後にLagerと改称——，そして最下級に「ツェルト」（Zelt）という四階級から成っていた。下部組織は上部組織に絶対服従であった。『資料』に収められた義人同盟規約，第三十五，三十六条に示される「規約変更を目的とする提案権」並びに「被選挙リコール権」等は亡命者同盟規約には無く，従って当同盟組織の欠陥部分を改善したことを示すものである。

亡命者同盟の分裂は1836年に始まり，1837年9月には完了し，翌年7月には新規約を整え新しい組織となって登場する[43]。

亡命者同盟分裂の促進は組織内部に原因するのみか同盟をとりまく客観情勢に真の要因があったのではないだろうか。一つはスイスにおけるデマゴーグ狩りを逃れて若きドイツのメンバーが多数パリに来たことである。もともと若きドイツと亡命者同盟とは何らかの接触を求めあっていた。しかし前者の方としては後者

注(36) 「若きドイツ」については，Kowalski Werner, bearbeitet und eingeleitet von., *Vom kleinbürgerlichen Demokratismus Zum Kommunismus. Zeitschriften aus der Fuühzeit der deutschen Arbeiterbewegung (1834-1847)* Berl. 1967 S. XXXIV-S. XLVIII. および Fricke Dieter, hrsg. von., *Die bürgerliche Parteien in Deutschland 1830-1945. Bd. II.* Lpz, 1970. S. 238-S. 248 が有益である。

(37) Kowalski Werner bearbeitet und eingeleitet von., *Vom kleinbürgerlichen Lemokrotismus zum Kommunisms.* S. XL.

(38) Kowalski Werner., a. a. O. S. XL.

(39) 『資料』p. 13.

(40) Weitlng Wilhelm, *Garantien der Harmonie und Freiheit. Vorrede zur 3. Auflage.* in:Kaufhold Bernhald. Bernhard, mit einer Einleitung und Anmerkungen neu hrsg. von., *Garantien der Harmonie und Freiheit.* Berl. 1955. Anhang. S. 290.

(41) Mehring Franz, *Geschichte der Deutschen Sozialdemokratie* Mehrings Gesammelte Schriften Bd. I. Berl. 1960. 邦訳，林，野村，平井，足利共訳『ドイツ社会民主主義史』（上）。ミネルヴァ書房，京都，1968年，p.75. や Grünber, Carl., Die Londoner Kommunistische Zeitschrift und andere Urkvnden aus Jahren *1847-48.* in : *Grünbergs Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung.* Bd. IX.S. 251 では，恰も Schuster の指導によって正義者同盟が組織されたかのようにえがかれている。

(42) Kowalski Werner, *Vorgeschichte und Entstehung des Bundes der Gerechten.* Berl. 1962. S. 151.

(43) Schieder Wolfgang, *Anfänge der cteutschen Arbeiterbewegung-Die Auslandsvereine im Jahrzehnt nach der Julirevolution von 1830*-Stuttgart 1963. S. 45.

のカルボナリ組織形態を受け継ごうとはしていなかった。[44] そのことは，既に1835年2月中旬，若きドイツはMurten 湖畔の Faoug で開いた会議で「同盟員は同盟役員若しくは委員会のメンバーを管理し罷免する権限を得る」[45]こととして確認されていた。だからパリに逃れた若きドイツのメンバーが亡命者同盟に加入しようとする場合，その際に求められる厳格な規約に対し不満を洩らすことは疑いないことである。「いずれにしても，分裂にはかなりの混乱と実力行使もともなったようで，別に手打式によって組織再編成がおこなわれたわけではない」[46]。

義人同盟の創設は1838年における規約の採択とワイトリングによって著わされた義人同盟の綱領文書『人類，その現状と未来像』の公刊で結着がついた。[47] 新組織は根本的に小ブルジョア的民主主義・共和主義結社の亡命者同盟とちがってプロレタリア的共産主義の結社であった。

義人同盟の綱領文書に一貫する論旨はフェネダイが主張するように「労働によって平等を確立する国家を樹立する」ことでもなく，シュスターが述べる様な「国民工場の設置によって福祉を図る」ことでもなかった。敵との妥協なき闘いによって財貨共同体（Gütergemeinschaft）＝共産主義社会を建設することが強調される。労働者階級の解放は自らの手で勝ち取ることが高らかに宣言されたのである。

(七)

1840年代に入るとドイツ資本主義は急速に進展する。石炭生産は340万t（1800年当時30万t，1820年当時150万t），粗鋼生産は19万t（同，4千t，同，9万t）に急上昇する。ザクセンでは，1822年から1835年には，21台で260馬力の蒸気機械が1836年から1840年，には32台で536馬力に，プロイセンでは1837年と1849年の間における蒸気機械の数は423台で7,513馬力から，1,264台，67,149馬力へと増大する。また1835年にニュルンベルクとフュルト間に敷設されただけの鉄道は1840年に入ると総計594kmに延長した。[48]

「大工業が定着しはじめた都市においては，大工業とともにただちに，大衆の困窮が恐るべき随伴現象をともなってやってきた。ベルリンの工場の蒸気機関は，フリードリヒ・ヴィルヘルム四世治政の最初の九年間に，392馬力を持つ29台から，1,265馬力を持つ193台に増加した。同じ期間に娼婦は1万人に，犯罪者は1万2千人に，慈善を受けている者は6千人に，乞食は4千人に，監獄及び労働矯正所の収容者は3千人に達した。これに対し，生活能力のある市民の数は僅に2万人と計算されている。手工業は，工業機械と商業倉庫の間の手マリになってしまっていた。ベルリンの4千人の独立の仕立屋のうち3/4は十分な仕事をもたなかった。反対に，仕事のない親方を非常に安い価格でしぼり上げている206の衣料店があった。……手工業とともに，手工業的生産に基づいている市民の家計も破壊された。」[49]

それでも大工業プロレタリアートの困窮は，とくに紡績工業における家内工業労働者のそれにくらべれば，まだましなように思われる，[50] と言われている。メーリンクは『バルメン新聞』に載ったヴッパータールの家内工業の織布工に関するる論文から引用する。「織布工は，朝鶏鳴と共に起き，深夜まで，ことによると夜半すぎまで働かなければならない。彼の力は急速に消耗し，彼の感覚は時ならずして麻痺する。彼の胸は絶えずしゃがみこむのに耐えられず，肺は病み，喀血がはじまる。四肢もまた衰え，麻痺する。こうして，労働者の肉体は，いち早く墓地の花と化する」[51] と。

『資料』には，「革命前における労働者階級の状態」の一項にヴィルヘルム・ヴォルフの『シュレージェンの貧困と暴動』が収録されている。「家内工業の悲惨さのこの地獄で，苦しみの最も大きかったのは，シュレージェンの紡績工と織布工だった。彼等は依然として

注(44) Kowalski Werner., *Vom Kleinbürgerlichen Demokratismus zum Kommunismus.* S. XXXVII.
(45) a. a. O., S. XLII
(46) 『群像』p. 28.
(47) *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*-Bd. I. Berl. 1970. S. 12.
(48) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED hrsg. von., *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung- CHRONIK-* Teil. 1. Borl. 1965. S. 13（以下*CHRONIK*と略）
(49) メーリンク，前掲書，p.175-p.176.
(50) メーリンク，上掲書，p.176-p.177.
(51) 上掲書，p. 177.

封建制度の泥沼に両足を突込んでいながら，その身体は，資本主義競争というはげしい旋風にさらされていた。」[52] ヴォルフはトロイムント・ヴェルプなる人物の報告記事——20人以上の織工によって確認した——から重要なデータとして紹介する。「当地の山岳部の多くの町村では，食料品の価格がすべて大都市並みに高い。否，時には都市以上に高く，満足に買い求めることもできない。特にパンの類は，目方不足が当り前といった状況である。……まったく財産を持たない貧乏人が年に6ないし8ターレルで借りているような，汚なく，暗い，不健康な小屋には立ち入るまい，飢えそのもの，ひどい困窮が支配する食堂，領主の家畜小屋さえこれにくらべれば豪華な大広間と呼ばねばならぬような，そうした場所には眼を向けまい」[53]と。山岳地域の状態は悲惨の極に達していた。「比較的小さな町村でも不幸な人々の数は驚くほど多い。たとえばドルフバッハでは31人，グルントでは38人，ノイゲリヒトでは110人，トッシェンドルフでは48家族，ツェトリッツハイデでは72家族が極端な状況に追い込まれていた。すべて織工，糸巻き工，紡績工である。」[54]

没落の最後の段階は，同時に上昇の第一段階となった。近代的プロレタリアは，暴力によって人間性を失なわされるものではない。このような恐るべき過程が貫徹される時，弱者といえども，毒を制するに毒をもってするものである。1844年6月4日，オイレン山脈のふもとの地域で暴動が勃発した。ヴォルフは書く。「今や制しがたいものとなったプロレタリア劇の血の第一幕が，少なくとも序幕が始まった。それは，金力と狡猾な打算によって機械の地位に貶められ踏みつけられた人間が人間としての尊厳を回復しようとする闘いであり，私有財産制の専横と利己主義に対する無産者の闘いであった」[55]と。

1844年の労働争議は1830年代のそれより多かった。[56] シュレージェンの暴動を初めとして，ブレスラウ，ベルリーン，マグデブルク，レンネブルク，デュッセルドルフ（以上プロイセン），プラク，ベーメンライパ，ライヘンベルク（以上オーストリア），ミュンヘン，インゴルシュタト（以上バイエルン），ウルム（ヴュルテンベルク），クラウスタール（ハノーファー），ラーデブルク（ザクセン）等の地域で労働者のデモやストライキが起っている。[57]

プロレタリアートはドイツに存在していた。その靴音は徐々に高く響いてくる。「プロレタリアートの告知板」[58]として真正社会主義の雑誌が登場してくるのもこの頃である。理論的代弁者として「モーゼス・ヘス」オットー・リュニング，カール・グリュン，そしてラインラントやシュレージェンやザクセン王国出身の著述家たちを有していた。[59]」その雑誌を通じてプロレタリアートの惨状が，ドイツ的惨めさが暴露されていった。代表的なものは『*Gesellschaftsspiegel*』，『*Rheinische Jahrbücher zur gesellschatlichen Reform*』，『*Deutsches Bürgerbuch für 1845*』，『*Das Westphälische Dampfboot*』『*Trierische Zeitung*』等である。

真正社会主義は「理論的にはフォイエルバッハから出発し，その宗教批判を経済社会に適用した。それは，現代の貨幣貴族制のなかで疎外され孤立した『真ならざる』人間と類的本質態としての『真なる』人間とを，歴史の中でつきあわせようとした。前者は人類のいわば前史として，後者は真の人間史としてあらわれることになる。その転換を人間の意識ないし自覚による変革の途としてとらえたのである。変革が実存から本質への意識の回帰としてとらえられる限り，その転換には断絶が伴う。そのために，その変革過程の中には，ブルジョアジーないしは自由主義が過渡的に入り込んでくる余地がなかった。そしてそのことが決定的時点でのマルクスの批判につながる。[60]」

「社会的本質，人間の類的本質，彼の創造的本質は今日まで人間にとって神秘的・彼岸的存在であったし，

注(52) 上掲書，p. 177.
(53) 『資料』p. 162.
(54) 上掲書，p. 164.
(55) 上掲書，p. 164.
(56) CHRONIK. S. 16.
(57) Zentralinstitut für Geschichte der Akademie der Wissenschaften der DDR hrsg. von., *Atlas zur Geschichte Bd. 1.* Gotha/Lpz. 1973, S. 87（以下 *Atlas zur Geschichte*と略）
(58) 『資料』p. 328.
(59) メーリンク，前掲書，p. 192.
(60) 『資料』p. 328.

またあり続けてきた。それは政治的生活においては国家権力として，宗教生活においては天上の権力として，理論的には神として，実践的には貨幣権力として人間に対立してきた。人間は，政治的な自由を，さもなくば宗教的自由を，理論的自由を，さもなくば実践的な自由を求めたが無駄であった。……どんな学問も芸術も，人間が人間的な学問と芸術を認識し実地に用いない限り，……彼を自由にすることはできなかった。人間の生命や自己活動は，生命一般と同じく，すべての肉体的諸力の有機的な結合，組織された協働のなかにある。……人間存在は社会的存在としてのみ，真にかつ現実的に生気を持つ。」(61)

真正社会主義の理論は『ドイツイデオロギー』，『共産党宣言』でマルクスやエンゲルスによって批判される。マルクスやエンゲルスの批判の眼目は，真正社会主義一般に共通する人間主義にあるのだ。つまり，その「人間主義から導き出される革命論が，それもドイツ革命論が問題だったのだ。そのことを抜きにしては，マルクスやエンゲルスがブリュッセル時代に『ドイツイデオロギー』の筆をとった意味はわかるまい。」(62)

封建貴族と絶対君主制とに対する，ドイツの，とくにプロイセンのブルジョアジーの闘争，一言でいえば自由主義運動は，ますます深刻になってきているなかで，「つまり現状の分析を抜きにして，人類を，つまり世界史を問題にすること自体が問題であったのだ。」(63)

(八)

1847年6月2日から9日まで義人同盟の大会がロンドンで開かれた。ここで共産主義者同盟に名称が改められる。

前年の2月には，ブリュッセルに共産主義通信委員会がマルクス，エンゲルス，フィリップ・ジゴ等によって組織された。4月下旬にはヴォルフが当地に立ち寄り，マルクス，エンゲルスと親交を結び共産主義通信委員会に加盟する。同委員会はブリュッセルを本部にParis, London, Kiel, Beckerode, Schildesche, Rheda, Barmen, Köln, Liegnitz, Landethut, Striegeu, Breslau, Frankensteinに支部を結成した。(64) このうち Liegnitz 以下5支部はシュレージェンに集中している。

更にエンゲルスを通じてチャーティスト指導部（ことにジュリアン・ハーニー）との連絡もとれている。(65) 1846年秋にはパリにあった義人同盟中央本部がロンドンに移った。ロンドンにはシャッパー，ハインリヒ・バウアー，ヨーゼフ・モル等がいる。義人同盟自体，ドイツ連邦地域内はもとよりヨーロッパ各国にも支部を持ってはいる。(66)

しかし義人同盟内は四分五裂している。ワイトリング流のプロレタリア革命論もいればカベー流の平和改革路線派もいる。革命の対象はドイツでしかない。ドイツの現状に応じた革命の具体的戦略・戦術がどうあるべきかに議論が収斂する。

義人同盟全国大会を開催する以前に各国に散らばる同盟支部を一つの路線，一つの方針の下に団結させることが焦眉の問題となる。同中央委員会は各支部に呼びけかける。「今日のヨーロッパの情勢，とりわけドイツの情勢に注目するとき，社会主義ないし共産主義的理念が随所で目ざましい展開をとげつつあり，多少なりとも今日の社会変革を主張しない限り，いかなる党派も最早支持を得られぬという事実を否定できない。——現代のこの偉大な運動を更に推進し，これを力の及ぶ限り，指導することこそ，われわれに課せられた使命なのである。なぜならこのような活動を通じてのみ，われわれは一つの強力な党を結成することができ，われわれの敵に効果的な打撃を与えることができるからである。」(67) 1846年11月のことであった。だが，この呼びかけは効を奏さなかった。ドイツの情勢は緊迫度を増し，官憲の弾圧は厳しくなり義人同盟の活動も殆んど停止していたと思われる。つまり義人同盟中央本部が期待していたほどの反響が得られなかったのである。1847年2月に出される第二回目の呼びかけには

注(61) 上掲書，p. 351-p.352.
(62) 上掲書，p. 469.
(63) 上掲書，p. 469.
(64) Atlas zur Geschichte. S. 87.
(65) 『群像』p. 129-p. 130.
(66) フランス，イギリス，デンマーク，スウェーデン，オランダ の各大都市には存在していた。*Atlas zur Geschichte S. 87* を参照。
(67) 『資料』p. 105

「いまだに一片の書簡も呼びかけも送付して来ない地区がいくつかある[68]」と報告されている。

1847年2月といえば，義人同盟中央本部を代表してヨーゼフ・モルがブリュッセルのマルクスを訪れ，彼に同盟加入を勧告したと言われる時期である。この辺の経緯については「事実上共産主義者同盟の最初の土台石がおかれたこの会談で，何がどのように話し合われたのか，われわれにはわからない。マルクスやエンゲルスの回想も，また後年の諸研究もほとんど例外なく，ここでマルクスとエンゲルスにたいして同盟への加入が要請されたのだと述べている。しかし，それは主要ではあったが，なお一つの事実であったろう。この話し合いはもう一つの側面をもっていたはずである。それは，マルクスとエンゲルスが義人同盟に加入すると共に，従来からの共産主義通信委員会を発展的に解散させる[69]」ということが推測されるにすぎない。ただ，ブリュッセル共産主義通信委員会と義人同盟との合同が図られたことには違いない。

第二回の呼びかけで注目すべき点は，社会主義と共産主義の区別が明らかにされるなかでワイトリング流の財産共同体論やフーリエ主義と一線が画され，更に「若干の地区で共産主義者のあいだに蔓延しているらしいあの浅薄な愛の夢想[70]」，つまり真正社会主義を「断固克服」する必要が強調されていることである。更に「公的機関誌を持たぬ党の存立は不可能である[71]」として機関誌発行に関する討議が要請されたことである。これは1847年9月に『共産主義雑誌』Kommunistische Zeitschrift となって一冊だけ出版された。『資料』には，この党機関誌から，カール・シャッパーの『プロレタリア』とヴォルフの『プロイセン州議会とプロイセンおよび全ドイツのプロレタリアート』が収録されている。シャッパーの論文では「体糸いじり」の共産主義や「一切を愛によって遂行しようと考える共産主義」が最早必要ではなく，「政治的諸権力を実力で闘いとる[72]」ことの重要性が強調される。

来たるべきドイツの革命は全面革命か部分革命か，プロレタリア革命を目指すのか，それとも特殊ドイツの状況を打ち破る，つまり封建絶対制を打倒してブルジョアジーを指導的階級に高めることが先決か選択の余地はない。「ヴォルフの論文が同盟機関誌に掲載されたことは，なによりもブリュッセル在住のマルクスらの戦略的分析がいまや同盟の指導理論となりつつあったことを示している[73]。」

ヴォルフは強調する。「ブルジョアジーがわれわれの敵であることは確かである。彼らは私的所有，資本，その他それとつながりを持ったものを彼らの金権力の支柱としている。われわれプロレタリアは，私的所有を廃棄し，したがってブルジョアジーの階級を絶滅させ，同時にありとあらゆる階級区別一般に最後のとどめを刺すときにのみ，自らを解放することができる。したがって，彼らとわれわれの間で問題となるのは生死を賭した闘いであり，口先だけでなく握りこぶしとマスケット銃による闘いである。

だがわれわれドイツのプロレタリアは，社会的混乱状態を完全に改めて自分たちの利益をはかるところまで，つまりブルジョアジーをただちに打倒し，共産主義の原理を実現しうるところまで進んでいるだろうか。ブルジョアジーとならんで，またブルジョアジーよりさらに前方にもう一つの敵がわれわれに対峙しており，われわれがブルジョアジーを方付けようと思うなら，まずその敵を打ち負かさねばならないのではないか？そのもう一つの敵—それは絶対的で無拘束な王制[74]」である。「ブルジョアジーはその支配を築くためには『絶対』王制があくまでも拒んでいる政治的自由を必要とするのだし，またわれわれプロレタリアはそうした政治的自由の拡大を現存体制のより速やかな打倒のための梃子とし利用できるのであって，そうしたことを考慮に入れてみるならば，われわれはたしかに現在の政治的運動に係りをもっており，われわれの利益からしても，かの王制の排除を速やかに押し進めることが必要だということが明らかとなる。われわれの歩む道はそこまで一緒だが，それから先は別々である。『神の加護を受けた』敵，すなわち『キリスト教的警察国家』，『父権的』政府が潰滅するや，そのときはじ

注(68) 上掲書，p. 110.
(69) 『群像』p. 174-p.175.
(70) 『資料』p. 114.
(71) 上掲書，p. 112.
(72) 上掲書，p. 118.
(73) 上掲書，p. 122, Kowalski Werner., *Vom kleinbürgerlichen Demokratismus zum Kommunismus.* S. CVII.
(74) 上掲書，p. 128.

めてわれわれは究極の敵，すなわちブルジョアジーを相手どるのである。そのときには戦場を見とおすことも容易となるし，確信をもって作戦を立てることができる。……したがって出版の自由と自由な結社権をめざしている現在の政治運動は，われわれにとってきわめて重要である[75]」と。

ブルジョアジーが勝利するためには封建絶対制度の打倒が何よりも先決となる。プロレタリアートの敵はブルジョアジーに決まっている。「敵と闘う前に敵の敵と闘うこと」そしてブルジョアジーが勝利した後にはプロレタリアートとの全面対決が浮び上がる。

「共産主義は我々にとっては，作り出されるべき何らかの状態，現実が則るべき〔であるような〕何らかの理想ではない。我々が共産主義と呼ぶものは，現存の状態を廃止する現実的運動のことである。この運動の諸条件は，今，現に存在している前提から生じる[76]」

(ハ)

資料編集が至難困難この上ない作業であることは論をまたない。本書に収録された36篇の資料には千思百考・煩悶熟慮を重ねて選択したあとがにじみ出ている。「当初のプランは本書の約三倍であった。削りに削ってこれだけになった」(p. 1) と。

事実をして歴史を語らしめ，そして真実を問う。言うは易く行いは難い作業である。筆者は本書の編者，翻訳者の諸氏に心底から敬意を表する。

革命前の揺れ動く政治情勢，ドイツ各地で勃発する飢餓暴動，差し迫るドイツ革命の刻々とした変化，『共産党宣言』執筆にあたり草稿を練りに練るマルクス・エンゲルスの姿，が本書を通じて浮び出てくるようだ。

本書は恰も三月前期の精神が詰め込まれた一個の箱といった観がある。どこを開いてもその精神が箱から飛び出し踊り出す。本書を取り上げ紹介するには筆者にとって荷が重すぎた。密度の高い本書を薄めたうしろめたさが残る。誤解の点は寛恕願うばかりである。

とまれ，観念論的再構成を以て奇を衒う若きマルクス論が横行するなかで，本書公刊の意義は大きく断然信頼に値する。

(経済学部助手)

〔本『資料』に収録された諸資料は以下の通りである。〕

I 48年革命路線の確定過程

一 義人同盟をめぐる諸文書

1. プロパガンダ, Jakob Venedey, *Die Propaganda*, in : *Der Geächtete*. In Verbindung mit mehreren deutschen Volksfreunden hrsg. von J. Venedey, Jg. 1, 2. Heft, Paris 1834.

2. ある共和主義者の思想, Theodor Schuster, Gedanken eines Republikanes (Beschluβ). in: *Der Geächtete*, Jg. 2, Heft 3, Paris 1835.

3. 人類, その現状と未来, Wilhelm Weitling, *Die Menschheit, wie sie ist und wie sie sein sollte*, 〔Paris〕, 1839.

4. 共産主義者とはいかなる者か, 〔August Becker〕, *Was ist ein Kommunist?* Lausanne 〔1844?〕

5. 手工業職人の遍歴に関する条例, Regulativ in Betroeff des Wanderns der Gewerbs-Gehülfen, Berl. 1833, in : DZA Merseburg, Rep. 77, Tit. 500 ad Nr. 10, Die Kommunisten in der Schweiz, 1844-46.

6. 懇願と物乞いとわらじ銭, Wilhelm Weitling, Bitten, Betteln und Fechten, in : *Der Hülferuf der deutschen Jugend*. Hrsg. und red. von einigen deutschen Arbeitern, 2. Lieferung, Okt. 1841.

7. われわれの原理による統治形態, Wilhelm Weitling, Die Regierungsform unsers Prinzips, in: *Die junge Generation*, 6. Lieferung, Jun. 1842.

8. イギリスにおける社会組織の進歩, E. Stammwitz / K. Schapper / J. Moll, Die Fortschritte des sozialen Systems in England, in : *Die junge Gneration*, 5. Lieferung, May 1842.

9. 社会問題, Wilhelm Marr, Die sociale Frage, 1., 4., und, 5. Artikel, in : *Blätter der Gegenwart für sociales Leben*, Probenummer, Nr. 4und Nr. 5, Dez. 1844, März und Apr. 1845.

10. ドイツ義人同盟規約, *Statuten des deutschen Bundes der Gerechtigkeit*, in : L. Fr. Ilse, Geschichte der polititschen Untersuchungen, welche durch die neben der Bundesversammlungerrichteten Commis-

注(75) 上掲書, p. 130-p. 131.

(76) Marx. K/Engels. F., Die deutsche Ideologie-Kritik der neuesten Philosophie in ihren Represäsentdnten Feuerbach, B. Bauer und Max Stimer, und des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Propheten— MEW. Bd. 3 Berl. 1969s. 35.『マルクス・エンゲルス全集』「ドイツ・イデオロギー」, 第3巻p.31-p32.

sionen, der Central-Untersuchungs-Commission zu Mainz und der Bundes-Central-Behörde zu Frankfurt in den Jahren 1819–1827 und 1833–1842 geführt sind, Frankfurt a. M. 1860.

11. 義人同盟中央委員会の同盟員への呼びかけ, Adresse〔der Zentralbehörde des Bundes der Gerechen an den Bund〕, Nov. 1846 und Feb. 1847, in : *Demokratisches Taschenbuch für 1848*, Lpz. 1847.

12. プロレタリア〔Karl Schapper〕, Proletarier in : *Kommunitische Zeitschrift*, Probenummer, 1847.

13. プロイセン州議会とプロイセンおよび全ドイツのプロレタリアート, 〔Wilhelm Wolff〕, Der Preußische Landtag und das Proletariat in Preußen, wie überhaupt in Deutschland, in: *Kommunistische Zeitschrift*. Probenummer, 1847.

14. プロレタリア革命の諸帰結, Moses Heß, Die Folgen der einer Revolution des Proletariats, in : *Deutsche-Brüseller-Zeitung*, Nr. 82, 87, 89 und 90. Brüssell. 14., 31. Okt. 7., 11 Nov., 1847.

二　革命前における労働者階級の状態

1. シュレージェンの貧困と暴動, Wilhelm Wolff, Das Elend und der Aufruhr in Schlesien, in : *Deutsches Bürgerbuch für 1845*. Hrsg. von H. Püttmann, Darmstadt, C W. Leske, 1845.

2. 貧困とプロレタリアート, Josepf Weydemeyer, Armuth und Proletariat, in : *Das Westphälische Dampfboot*. Eine Monatsschrift. Redigiert von O. Lünning, 2. Jg., Heft XII., Bielefeld, A. Helmich. 1846.

3. 『ゲゼルシャフツシュピーゲル』誌の報告から, Aus Notizen, in : *Gesellschaftsspiegel*, Organ zur Vertretung der besitzrlosen Volksklassen und zur Beleuchtung der gesellschatlichen Zustände der Gegenwart. Redaktiert von M. Heß. Elberfeld 1845–46.

Ⅱ　ヘーゲル左派のイデオロギー闘争

一　プロイセン国家批判

1. ヘーゲル法哲学と現代政治, Arnold Ruge, Die Hegelsche Rechtsphilosophie und die Politik unserer Zeit, in : *Deutsche Jahrbücher für Wissenschaft und Kunst*. Lpz., O. Wigand. 10., 11., 12., 13., Aug. 1842.

2. プロイセンにおけるユダヤ人の法的地位, 〔L. H. F. Buhl〕, Die gesetzliche Stellung der Juden in Preußen, in : *Der Patriot*. Inländische Fragen. Hrsg. von L. Buhl. 2. Heft, Berl., W. Hermes, 1842.

3. キリスト教国家と現代, Bruno Bauer, Der christliche Staat und unsere Zeit, in : *Hallische Jahrbücher für deutsche Wissenschaft und Kunst*. Hrsg. von Echtermeyer und Ruge. No. 135–140, Lpz., O. Wigand, 1841.

4. 雑感, Karl Nauwerck, Dies und Jenes, in : *Berliner Blätter*, Berl. 1844.

二　現状批判とアナーキズム

1. ヘーゲル哲学とヘーゲル学派, Anonymus, Ueber die Hegelsche Philosophie und Hegelsche Schule, in : *Athenäum. Zeitschrift für das gebildete Deutschland*. Red. von Karl Riedel. Nr. 29, Berl., 24. Juli 1841.

2. 理論革命と中道派批判—アリソンのヨーロッパ史によせて— Edger Bauer, 〔Die Besprechung der〕 Geschichte Europas seit der ersten französischen Revolution von Archibald Alison, deutsch von Dr. Ludwig Meyer. 1. und 2. Bd. Lpz., Otto Wigand, 1842, 1. Artikel, in : *Deutsche Jahrbücher für Wisseuschaft und Kunst*, No. 297, 14. Dec. 1842.

3. 現代のユダヤ教徒とキリスト教徒の自由になりうる能力, Bruno Bauer, Die Fähigkeit der heutigen Juden und Christen, frei zu werden, in : *Einundzwanzig Bogen aus der Schweiz*. Hrsg. von G. Herwegh, 1. Tl., Zürich u. Winterthur, Verlag des Literarisehen Comptoirs, 1843.

4. 1842年—急進的批判の批判, 〔Bruno Bauer〕, 1842, in : *Allgemeine Literatur-Zeitung*. Monatsschrift, hrsg. von B. Bauer, Bd. II., Heft 8, Berlin, Egbert Bauer, Juli. 1844.

5. いまやなにが批判の対象であるか, 〔Bruno Bouer〕, Was ist jetzt der Gegenstand der Kritik ? in : *Allgemeine Literatur-Zeitung*. Monatsschrift. hrsg. von B. Bauer, Bd. II., Heft 8. Berlin. Egbert Bauer, Jul. 1844.

6. 愛の国家についての試論, Max Stirner, Einiges Vorläufige von Liebesstaat, in : *Berliner Monatsschrift*. Hrsg. von L. Buhl, Erstes und einziges Heft, Selbstverlag von L. Buhl, Mannheim 1844.

7. ルードヴィヒ・フォイエルバッハ, Anonymus, Ludwig Feuerbach, in : *Norddeutsche Blätter. Eine Monatsschrift für Kritik, Literatur und Unterhaltung*, Hrsg. unter Verantwortlichkeit des Verlegers. Heft IV., Berlin, A. Bieß, Okt. 1844.

三　真正社会主義と共産主義論

1. 共産主義・社会主義・人間主義, Hermann Semmig, Communismus, Socialismus, Humanismus, in : *Rheinische Jahrbücher zur gesellschaftlichen Reform*. Hrsg. unter Mitwirkung mehrerer von H. Püttmann, 1. Bd., Darmstadt 1845.

2. 共産主義の信条, 〔Moses Heß〕, Kommunistisches Bekenntnis in Fragen und Antworten, in : *Rhein-*

inche Jahrbücher zur gesellschaftlichen Reform. Hrsg. unter Mitwirkung mehrerer von H. Püttmann. 2. Bd., Belle-Vue bei Constonz 1846.

3. 社会主義について一言, Otto Lüning, Ein Wort über den Sozialismus, in : *Dies Buch gehört dem Volke,* Hrsg. von O. Lüning, 1. Jg. 1845.

4. ドイツにおける社会主義運動, Moses Heβ, Über die sozialistische Bewegung in Deutschland, in : *Neue Anekdotd.* Hrsg. von K. Grün, Darmstadt 1845.

5. ヒューマニズム—共産主義, Anonymus, Humanismus—Kommunismus, in : *Das Westphälische Dampfboot.* Eine Monatsschrift. Red. von O. Lüning, 1846.

6. フォイエルバッハと社会主義者, Karl Grün, Feuerbach und die Socialisten, in : *Deutsches Bürgerbuch für 1845.* Hrsg. von H. Püttmann, Darmstadt 1845.

7. 現代フランスの社会主義と共産主義, Lorenz Stein, *Der Soicalismus und Communismus des heutigen Frankreichs.* Ein Beitrag zur Zeitgeschichte. Lpz., O. Wigand. 1842.

8. カール・マルクスへの回答, Karl Heinzen, *Die Helden des teutschen Kommunismus. Dem Herrn Karl Marx gewidmet.* Bern. 1848 : III. Antwort an Karl Marx.